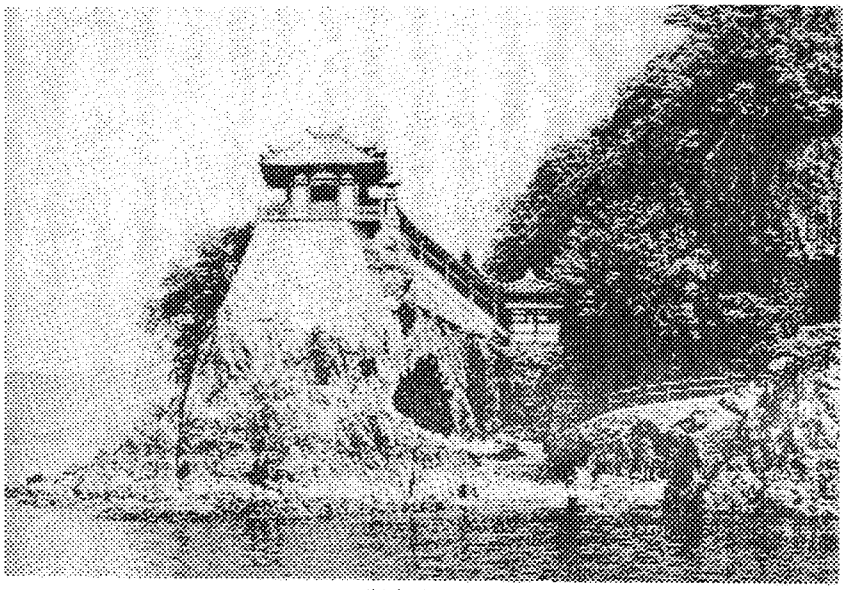
備陽史探訪の会6月バス例会

沼隈半島の歴史を訪ねて

2003(平成15年)6月1日実施

現地探訪資料



講師　田口義之

備陽史探訪の会

スケジュール

・　８時３０分	福山駅北口発
・　９時	今伊勢宮（神村町）
・　９時３０分	承天寺（松永町）
・　１０時３０分	馬取貝塚（柳津町）
・　１１時	岡本山路家屋敷跡（藤江町）
・　１１時３０分	金江大ムロの木（金江町）
・　１２時	金見八幡社（昼食）
・　１３時３０分	満越遺跡（尾道市浦崎町）
・　１４時	宝田院（沼隈町常石）
・　１４時４５分	阿伏兎観音（沼隈町能登原）
・　１５時１５分	草深の唐樋門（沼隈町草深）
・　１６時１５分	山本滝之助記念室（町立図書館）
・　１７時３０分	福山駅北口着解散

例会のルール

１、　集合時間を守りましょう

２、　説明中は私語を慎みましょう

３、　ゴミは持ちかえりましょう

神村町

「神村」と書いて「かむら」と読みます。『沼隈郡誌』等によりますと、町名の起源は『倭姫世紀』に見える吉備名方の浜宮に由来すると伝えます。

すなわち、現在伊勢神宮にお祭りされている天照大神は、初め宮中に奉斎されていましたが、崇神天皇の時代に宮外にお移しすることになりました。そして、伊勢に鎮座される前四年間程滞在された「吉備名方の浜宮」の故地こそ同地の鏡山で、神村の地名はこの故事に由来すると言うのです。

神話や伝説は別として、神村の地は古くから開けた地域です。町内の南東部にあたる字松本には全長五〇メートルに達する帆立貝式前方後円墳「松本古墳」が存在し、中央部の羽原川流域には点々と横穴式石室が分布し、古代豪族の活躍を物語っています。また、この地で注目されるのは、町内北部に「須江」の地名が残り、「須恵器」と呼ばれる古代の土器窯の跡が存在することです。須恵器は西暦五世紀頃、朝鮮半島から渡来した新しい土器で、その職人集団が「須恵部」と呼ばれた人々です。須恵部の活躍の跡は全国各地及びますが、ここ神村の須江も彼らの居住に因む地名であることは間違いありません。

時代が下ると、この付近にも庄園が設定されたようです。京都の石清水八幡宮の記録によりますと、同宮の庄園は備後に三カ所あって、その一つに「神村庄」の名があります。同庄は、現在『広島県史』等では御調町の「神」に比定されていますが、ここ福山市の神村一帯である可能性も残っています。まず、近世の記録に沼隈郡神村庄の名があること。また、御調の神は「かみ」村であって、「かむら」ではないことです。中世の神村庄は、庄号自身が神村ですから、こちらのほうに分があるわけです。石清水の分霊である八幡宮も御調町の「神」にはなく、神村にはあります。

神村庄は、果たして何処にあったのか、興味の尽きないところです

今伊勢内宮外宮（福山市神村町甲六、〇〇二）

（通称）いせみやさん

祭神　天照皇大神、豊受皇大神

例祭　一月十五日（旧例祭日旧暦）一月十六日）

本殿（内宮本殿）　三間社神明造、銅板葺（間口二間一尺、奥行一間三尺）、（外宮本殿）三間社明造、向拝付（間口三間、奥行二間三尺）

付属社殿　内宮幣殿（三坪）、内宮拝殿（一〇坪）、外宮幣殿（三坪）、外宮拝殿（一二坪）、神輿舎（五坪）、手水舎三坪）、社務所（四一坪）、鳥居二基

境内地　一一、八二三・〇六坪

境外地　三一、七一三・五三坪

摂末社　十五社
合祀社（祭神不詳）、天神社、荒神社、稲荷神社、護国神社（二百四土九柱の英霊）

宝物　絵馬十四面（福山藩主阿部家奉納）、太刀一口（銘、菅原包則）、三十六歌仙額

由緒　崇神天皇御宇、豊鍬入姫命が天照大御神を名方浜宮に四年斎き祀る。その旧跡に当宮が鎮座し、この由を鏡山（御神鏡に因む）、この地を神村と称す。『今伊勢神明注縁起』によると、応水三十三年（一四二六）平朝臣大夫末次が伊勢に参宮し、七夜参篭すると霊夢があり、鳥居に五寸の青目石があるのを国へ待ち帰るべしとお告げがあった。泉州境水圧に帰り、同三十五年になって西国へ供奉すべしとの霊夢があった。そこで摂津、播磨、備前、備中へ至るも何のしるしもなかったが、備後国沼隈郡神村庄の鏡山仁至ると一足も進むことができなくなり、神慮に適う地として石を安置した。すると人々群集し、野気沼掃部頭が社地を寄進し、同年二月に外宮を造り、正長二年（一四二九）四月に内宮を造営したという。文安二年（一四四五）神主荒木田平末次が願主となって領主杉原平朝臣政光が社殿を再興している。文明八年（一四七六、なお文明九年とする記もある）八月十三日、火災に罹り、同十年十一月に再建御遷宮が行われている。その後、明応七年（一四九八）、永正十五年（一五一八）、永禄四年（一五六一）に社殿の再興修復があった。江戸時代には福山藩主水野家の崇敬篤く、元和八年（一六二二）に内宮再興、寛永十一年（一六三四）に外宮の修復が行われた。今の社殿は大正八年に造営された。昭和六年、県社に列格する。

伝承　社に七本の杉があり、三杉・四杉と称している。豊臣秀吉が九州下向の時にこの地で餅菓子を食し、その時の杉楊枝七本を「みずき世すき」と唱えて挿し置いたものが芽を出したものと伝える（『備陽六郡志』）。『広島県神社誌』より

※一部省略

松永町

ＪＲ松永駅の南口に降り立つと、その変貌には驚かされます。かつて塩田が広がっていた駅前には、広い道路が真っすぐ南に伸び、両側にはモダンな住宅や商店が軒を並べています。

今から三百余年前、本庄重政が“袋の海”と呼ばれていた

松永湾を埋め立てて、塩田を造成しようとした時、ここには遠浅の海原が広がっていました。陸は、現在の神村から南に“松崎”と呼ばれる岬が、南に突き出ていたのみでした。

松永の埋め立ては、万治三年（一六六〇）の春に始まったと伝わっています。当時重政は、福山藩に帰参して七年目で五五才、既に多くの干拓事業を手掛け、藩の興廃を一身に担った感がありました。しかし、松永塩田の造成は、その彼にとっても容易な工事ではありませんでした。沖に築造した堤防は嵐のたびに流され、完成は七年後の寛文七年（一六六七）と伝わっています。

松永の町名はこの時に生まれました。この地は初めにお話ししたように、神村の松崎の地先に造成されました。重政は、その「松」にちなんで、中国の吉祥句「松寿永年」から、新たに造成された土地の繁栄を祈って「松永」と命名したのです。

それだけに重政のこの塩田に対する愛着は深く、自らの居宅（現在の本庄神社の地）を塩田の東の丘の上に移し、その南には菩提寺として承天寺を建立しています。そのため彼によって造成された松永村は、いつしか“本庄村”と呼ばれるようになったと言われています。

しかし、これが彼の子孫に災いしました。彼のこの行為は、福山藩の中に本庄氏の別天地を作ることでした。重政が生きているうちは彼の声望を憚って黙認していた藩も、彼が延宝四年（一六七六）に没するとさっそく本庄氏の追放を画策します。すなわち、喧嘩という些細な罪を取り上げて重尚を領内から追い出し、本庄氏の勢力を松永から一掃してしまうのです。

県史跡本庄重政墓

重政は福山藩主水野氏に仕えた本庄重昭の嫡子として生まれたが、家督を弟重幸にゆずり、江戸に出て兵法を修業し、島原の乱の際には戦功をたてた。半生の放浪を終え、岡山藩主池田光政に仕えた後、福山藩に帰った彼は、当初、高須（尾道市）に居を構え、新田開発、干拓や塩業の発展に努力し、延宝４年（１６７６）７０才で松永に没した。明暦２年（１６５６）に御津新涯を、翌年には深津郡各地の新田を、万治２年（１６５９）には高須新涯を開いた。また万治３年（１６６０）から松永干拓に着手し、寛文７年（１６６７）までに塩浜とし松永塩田の基礎をつくった。死後、自ら福山から移した本庄家の菩提寺承天寺に葬られた。墓石は八角柱形の特異な形をしたもので、松永を臨む承天寺墓地の一角にある。

（福山の文化財より）

本庄李左衛門重政

江戸時代前期の水野藩による干拓事業は、２人の有能な土木事業家によって進められた。１人は神谷治部。そして、も

う1人は、「松永開祖」として有名な本荘重政である。

重政ほど、波乱に満ちた人生を送った人物は少ない。彼の前半生は、いまだ戦国の余燼の中にあった。重政自筆の「経歴書」によると、彼の祖父は市兵衛といい、越中の大名佐々成政に仕え、「越中すえもりの合戦」で討死している。親の半左衛門も始め佐々成政に仕えていたが、天正16年（1588）、成政が秀吉の命によって切腹すると浪人し、諸大名を転々とした後、水野勝成に召し出され、250石の「普請奉行」を勤めたという。

戦国の侍にとって主君を替えるのはそれほど恥ずかしい行為ではなかった。なにしろ「侍は7度主君を替えなければ1人前ではない」と言われていた時代である。重政も、青年時代、青雲の志を抱いて諸国を放浪して歩いた。「親半左衛門存生中に立身仕度、方々へかせぎ申度折節、九州有馬へ罷越寺沢兵庫頭御手に付き、二十七日城乗りの先懸ケを仕る」、つまり、吉川英治の宮本武蔵よろしく“戦国に乗り遅れた青年”として、寛永15年（1638）の島原の乱に、浪人の身の上ながら“一番乗り”を果たしたというのである。

残念ながら、時代は既に“徳川三百年”の太平に向かって大きく動き出していた。槍一筋で大望を果たすことは難しい。重政も島原の乱の手柄を引っ提げて“大禄”にありつこうとするが、それは叶わぬ夢であった。彼は一応備前岡山の池田家に二百石で仕官したが、約束の千石が二百石では話にならぬ、と飛び出してしまう。これが重政の人生の転機となった。池田家では、重政のこの行為を怒って、彼を「構」の身に処したのである。「構」とは、“この者は当家を理由があって浪人した者、召し抱えてもらっては困る”という、再仕官を不能にした厳しい処分である。

しかし、人生何が幸するかわからぬものだ。池田家を飛び出した重政は、播州赤穂の浅野家の家老大石頼母助（有名な内蔵助の父）のもとに身を寄せるが、このことが彼の後半性を決めた。赤穂といえば塩田で有名である。また、彼は兵法

者として、土木の技術にも堪能であった。

そこに目を付けたのが父の仕えていた福山藩である。彼が池田家を飛び出した承応元年（１６５２）は、水野氏２代勝俊の晩年にあたり、神谷治部も引退の時期を迎え、藩は治部に替わる人材を求めていた。ところが重政は池田家の「構」の身であった。そこで福山藩は、彼の嫡子重尚に五百石を与えるという名目で、重政を召し出した。承応３年（１６５４）のことである。

福山にやって来た重政は、まるで人が変わったように干拓事業に打ち込んだ。こうして、延宝４年（１６７６）、７１才で世を去るまで、有名な「松永塩田」（現在の松永の中心部、１６６７年完成）を始め、多くの干拓地が彼の活躍によって造成されるのである。（田口義之『クローズアップ備陽史』より）

柳津町

古く今津と共に、松永湾の港として知られた柳津には、一つの伝説が語り伝えられて来ました。町の背後にそびえる竜王山には、大昔“王（大）人”がいて、向かいの戸崎（尾道市浦崎町）との間を跨いで渡ろうとした。ところが、股を広げ過ぎて“金玉”を落としてしまった。だから、今でもその落ちたところは“こぶかり”といって、松永湾の深みになっている。

これは各地に残る巨人伝承の一つですが、柳津の場合、これが有名な神武東征神話と結びついて地名のいわれともなっています。つまり、王人は、神武天皇の家来で、天皇が九州から大和に向かわれた時、家来の王人の住むこの地にも立ち寄られた。そして、天皇の船のとも綱を結んだのが柳の木で、地名もこの故事に因んで名付けられた…。

伝説は、別にして、この地が古くから開けた場所であることは間違いないようです。町の東の馬取の丘には、縄文時代の貝塚が残り、広島県の史跡に指定されていますし、竜王山には古代の祭祀遺跡も見られ、弥生土器や古墳時代の土師器が出土しています。また、町の西端には「遍坊地」という字名も見られ、これは中世辺り一帯に存在した“藁江庄”の傍示（ぼうじ）、すなわち、境界を示す地名と考えられます。

この地が古代以来、港町として栄えたことは、柳津の鎮守橘神社の伝承にも見られます。この神社は古く「橘の宮」と称され、平安時代、政争に敗れた橘逸成の娘が、各地を漂白の末、この地に父の霊を祭ったことに由来すると伝えます。この伝承なども、この地が古くから“津（港）”として、繁栄を誇って来た一つの証しでしょう。

現在、町の沖は埋め立てられ、広々とした道路が沼隈方面に通じています。しかし、一歩旧道に踏み入れは、そこには昔からの町並みが続いています。“やにゃーづ”と聞いて、この一筋の町並みを思い出すのは、私だけでしょうか。

馬取貝塚

松永湾の東岸、金江と柳津の脊梁をなす竜王山から派出した海岸の丘陵突端にあった。丘陵東斜面(馬取東貝塚)と西斜面(馬取西貝塚)にそれぞれ包含されていた。西貝塚からは縄文後期後半の代表的な土器を出土し、標式土器として馬取式土器と名付けられた。貝塚は採土により消滅。東貝塚は土砂採集で丘を削るため発掘調査が行われた。最下部からは押型文土器が出土した。最も多いのは縄文中期の里木式と縄文後期の馬取式土器で、これに伴う石器や多量の魚介類・獣骨が出土、当時の松永湾岸の生活内容を物語る。なお東貝塚は保存運動の結果、わずか一部が標本的に残り、県指定史跡になっている。現在上屋を設け貝層が見学できるように保存工事が行われている。

下迫貝塚

松永湾の東岸、竜王山より派出する丘陵が柳津の海岸に迫る山麓に形成された貝塚。上層には製塩土器の師楽式土器がぎっしりと包含され、その下層に縄文後期後半の馬取式土器、さらにその下に後期の中津式土器、最下層に中期の里木式土器が貝層を交えて包含されていた。下層から縄文中期の土器に交じって、乳頭を突出し、女性を表現した土偶一点が出土している。【出典】平凡社刊『広島県の地名』より

金江町

松永湾の東岸に位置する金江町の“金江”は、町内の大字として今日も残っている金見の「金」と、藁江の「江」を採

って付けられた比較的新しい町名です。

町名の起源となった二つの大字の内、藁江は、中世の庄園“藁江庄”として史料に現れる由緒ある地名です。京都の石清水八幡宮に伝わる記録によりますと、平安末期の承安元年（一一七一）には、同八幡宮の社領として見え、既にこの時代には庄園として開発されていたことが分かります。　藁江庄で注目されるのは、この庄園が年貢として“塩”を上納していたことです。時代は下りますが、室町中期の文安三年（一四四六）の「藁江庄塩浜帳」によりますと、庄内には「塩浜」として「ナタ浜・ハタハリ浜・野島浜・平田浜」等の塩浜があり、合計五七俵余の塩を年貢として出していることが分かります。この内、野島・平田等は現在も字名として残っており、松永湾岸の塩業は、古く中世に逆上ることが分かります。

しかし、時代が室町末期になると、武家勢力の進出によって藁江庄の名も有名無実となります。既に室町中期には、備後の守護であった山名氏によって現地は管理されており、戦国時代に入ると、藁江氏・渡辺氏等の在地武士の押領によって庄園としての実態は全く失われています。町内中央の金見八幡社の背後の丘や、通称茶臼山と呼ばれる赤坂町との境界の山頂に残る山城跡は、彼らの活躍を今に伝えるものです。また、この町は、市内でも古代の史跡に恵まれた地域としても有名です。町内北西部に位置する福山園芸センター周辺には、六つ塚・元禄塚等の古墳や天津磐境と呼ばれる古代の祭祀遺跡が残り、訪れる者をはるかな古代のロマンに誘ってくれます。　なお、金見・藁江の内、金見は近世に入って藁江を分村してできた村で、現在の町名と町域は、この両村が明治二二年に合併して以後のものです。

『西備名区』藁江村

租高、九百四十一石七斗四升八合
　千七十九石四斗一升七合
　内分
　　五百六十四石六斗一升四合金見
　　五百十石人斗一升三合本村
　　五百六十三石五升五合

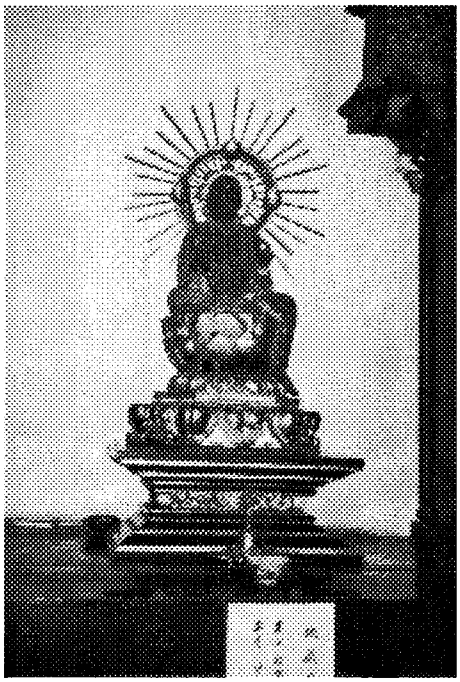
産社、八幡宮。　社地は金見村にあり、今に藁江八幡と称せり。

稲荷神社　皇太子社　森御前社　禎御前社　天満天神社。此外、小社共に十坐。

赤柴山城

藁江九郎左衛門繁義入道
　応永五年、當城を山田渡辺江渡し、藁江城へ移ると云。
渡辺源左衛門尉春網
　一本古城記、春の字を欠く。
同　越中守義綱
右二士、山田村住士。応永五年、當城へ移り、同十七年山

田村江帰ると云
藁江九郎左衛門繁義
　渡辺退城後、當城江帰り入る。
同九郎左衛門繁行
　応永十七年、父子當城へ帰る。菩提所、広福寺開基造営す、年紀知らず。
藁江城
初め藁江繁義、赤柴城に在城。山田渡辺、赤柴城に移るによって、繁義父子當城に入る。渡辺、山田に帰るに困而又赤柴城江帰る。此外、城跡二ケ所あり。古城記に城跡二ケ所、共に山南桑田氏より西北の押として軍士を篭置と云。
按に。藁江氏は応永の比なり、桑田氏は天文の頃山南に来れり。桑田氏軍士を篭置しは藁江氏より遥に後なるべし。
藁江氏、。桑田氏の問、居人分明ならす。
高徳山、広福寺。　禅宗、山手三寶寺末寺
開基、藁江繁行造営して菩提所となす。
月光山、法蔵坊真宗、近江本行寺末寺
開基、重円法師。明光上人の随身者、六坊の一寺也。
大東坊同宗、同末寺
開基、西円法師。明上（光）上人随身六坊
西（六郡志、福山志料、最）明坊同宗、同末寺
開基、正明法師。是も明光上人随身六坊。貞安（六郡志、福山志料、安貞）三年造立とそ。



金江町金見

赤坂町で国道を南に折れ、藁江峠を越えると、眼下に中世藁江庄と呼ばれた金江町の平野が広がって来ます。藁江庄のことは、以前に触れましたが、金江町の南半分にあたる同町金見のことは紙面の関係で割愛しました。
その北部、大字藁江との境に位置するのが、中世藁江庄の鎮守だった金見の八幡神社です。藁江峠を越え、平野に降りて来ると、左手に低い丘が続いています。道からは直接見えませんが、小学校の辺りで左に入ると、やがて丘の上に正面を南に向けた赤い社が見えて来ます。これが金見の八幡神社で

す。高い石段を昇ると、金江の沃野は勿論のこと、陽光に輝く瀬戸の海原も一望の下です。　平安時代の終わり頃、京都の権門勢家は、争って各地に庄園を求めました。地方豪族も自分達の開発した土地を守るために、権門を自分達の名目的な領主と仰ぎました。これが中世庄園の起こりです。藁江庄の開発領主は知られていませんが、金見の八幡社の丘の東に、一段高くそびえる藁江城の主が、或いはその後裔かも知れません。そして、彼が主と仰いだのが京都の石清水八幡宮でした。

　八幡信仰は、九州の宇佐神宮を発祥の地としていますが、奈良時代に近畿地方にもたらされ、さらに都が平安京に移されると共に王城鎮護の石清水八幡の成立となります。この地の開発領主もその権威にすがり、領地を守ろうとしたのでしょう。　しかし、中世に入り、庄園制が確立すると、庄園領主側も力を強め、本格的な庄園支配を目指します。その象徴が金見の八幡社です。立地を見ますと庄内を見渡す丘の上で、しかも庄園の代官の居城と推定される藁江城の尾根続きに位置します。石清水八幡は庄園を支配するにあたり、分霊をこの地に祀り、その支配の要としたのです。

　地名としての「金見」の意味は判然としませんが、中世藁江庄の中枢部分であったことは間違いありません。（田口義之『町名を訪ねて』）

金江の大ムロノキ（市指定天然記念物）

　ムロノキは別名ネズ・ムロ・モロギともいい関東以西の海岸に分布し、特に山陽地方に多いが、小高木で目通り周囲１ｍ、樹高３ｍ以内のものが殆んどである。金江の大ムロノキは、主幹は枯れているが、根元より出た側枝が旺盛な樹勢をみせている。主幹の目通り周囲は４．３ｍあり、側枝でも目通り周囲１．７ｍ、樹高約８ｍを測る。この木は枯死しても腐敗しにくいため枯れた主幹も倒れず残っており、これを除いても、当地方有数の巨木である。（福山の文化財より）

藤江町

福山の駅前から西南に約12キロ、赤坂から南に峠を越えると、前方にかつて袋の海と呼ばれた松永湾が広がっています。“袋の海”とはよく言ったもので、確かに松永湾は奥が広がり、入り口がすぼんだ“袋”の形をしています。今回訪ねる藤江町は、丁度この袋の東の奥に位置しています。藤江の町名は、「沼隈郡誌」に“江は河海に沈む地に称すること多し”とあるように沿岸部に多い地名で、かつてこの地が波静かな入江であったことを意味しています。しかし「藤」に関しては定説はなく、沼隈郡誌も古へ藤花多かりしものか、未だ審かならず”と匙を投げています。

その初見は、元和五年（一六一九）の「備後国知行帳」で、七〇〇石余の村として現れています。「福山志料」をひもときますと、江戸時代、この村は隣の金見村の八幡社を産土神としていたとありますから、中世に逆上ると、以前に金江町のところで紹介した藁江庄に含まれていた可能性があります。そうすると地形的に見て藤江は同庄の港であったことが考えられ、最近学界で話題となった「兵庫北関入船納帳」に見える藁江船籍の山名殿国料船は、この地の藤江港の船であったことが想像されます。「山名殿」とは、室町時代、備後の守護大名であった山名氏のことで、今は対岸尾道との間に、細々とフェリーの往復するだけの藤江港が、五百年前には瀬戸内の要港であったとは、歴史を現在の視点だけで見てはいけないことを私達に教えてくれます。

また、この地で忘れてはならないのは、近世の富豪として聞こえた岡本山路家のことです。幕末この家からは山路機谷が出て、数々の社会事業を行いました。しかし、浜の真砂は尽きるとも、よも岡本の財は尽きまじ―と謳われた同家も今は屋敷跡を残すのみです。港の北に残る立派な石垣は、栄華のはかなさ、空しさを無言の内に我々に語ってくれます。

山路機谷

松永から四方へ通ずる旧道で必ず目にするのは、峠に建つ「永代茶接待」と刻まれた石碑である。特に、事情通なら誰でも知っている松永への近道、赤坂町から金江に通ずる農免道路のそれは有名である。この道は、江戸時代以来の旧道を拡張したもので、峠は約10メートルぐらい切り下げられ、もともとこの石碑は、現在の場所から道を隔てて東側の旧道脇のお堂の傍らに建っていた。「永代茶接待」とは、交通の手段が自分の足より他になかった時代、ここで湯茶の接待を行っていたことを意味する。そして、幕末風雲の時代、この事業を自費で実施したのが松永の富豪として有名な山路機谷（1807～69）である。機谷は、当時「浜の真砂は尽きるとも、よも岡本の財は尽まじ…」と謳われた、屋号岡本山路家の当主として数々の公共事業を行い、また、文人として

も聞こえた人物である。機谷の山路家は、松永湾の漁業権をてこに財を成した家である。松永湾は水野勝俊の時代までは藩主の猟場所として一般の漁猟は禁じられていた。しかし、その後運上銀十校で福山新町の孫左衛門の受所となり、さらに貞享3年（1686）藤江村右衛門七（山路家）の請け負いとなり、これが明治5年のに漁場開放まで続いた。この権利は単なる漁業権だけではなかった。幕末にかけて盛んになった小規模な干拓事業や塩田開発に同家が介入し、後に同家が塩田を15カ所、田畑を13か村にわたって所有する強力な武器となった。すなわち、江戸時代後期の寛政12年（1800）、藩は「新規家作又は築山寄洲付洲等いたし度候は、得と藤江村右衛門七（山路家）へ口熟談の上」申請するようにと、「お触れ」をだしている。これは言わば山路家の承認がなければ新規の海面埋め立てが出来ないということで、同家はこの藩庁の意向をバックに田畑や塩田を集積して行った。つまり、山路家では、新規の海面埋め立ては漁場を狭めることになるから、埋め立て希望者は「代銀」を出せ、また、それがいやなら埋め立て地の一部を俺に差し出せというわけだ。機谷の活動は、こうした岡本山路家の事業を背景としてなされたものである。彼の公共事業としては、その他、藤江港の築港、航路標識の設置など海にかかわる事業が多いが、それはそもそも岡本山路家の経営基盤にかかわるものであった。また、彼の逸話に、食事は1食茶漬3杯梅干2個であったとあるが、なぜそうまで質素に暮らす必要があったのか。その行実の裏には今までの「偉人伝」を繰り返すだけでは済まない、歴史の謎が秘められている筈である。

満越遺跡　―古代海部族と製塩―

福山市の中心部から南西に約15キロ、沼隈半島の一角に尾道市浦崎町がある。旧沼隈郡内にもかかわらず尾道市に属しているのは、かつてこの地は福山方面から見て“陸の孤島”にあたり、舟運を利用して対岸の尾道に行くほうが便利であったためである。

尾道市浦崎町は、沼隈半島から西に突き出た小半島と、その先の陸繋島からなっている。昭和57年（1982）、この小半島の突端部“満越”で奇妙な形をした土器が発見され世間の注目を集めた。

土器は破片となって畑の地下にびっしりと敷き詰められたように存在し、復元して見ると高さ一〇数センチ、丁度現在のワイングラスのような形状となる。　一体この土器は、誰が、何のために作ったのか。

調べて見ると、この種の土器は、古代の海岸沿いに点々と分布している。福山市内でも浦崎の北に接する金江町からも出土しているし、東の大門町大門の“大門貝塚”周辺でも近年まで道路上に散乱していた。

この奇妙な形をした土器こそ、備後地方に“産業”の黎明

を告げた製塩土器、“師楽式土器”である。

人間は生理的に“塩分”を欠かすことはできない。また、日本は岩塩を産しない。こうしたところから、古代、文明が芽生えると、まず最初に出現したのが“塩業”であった。

当時の塩生産は、海岸に直径1．5メートル程の楕円形の“炉”を造り、この中に濃縮した海水を入れた製塩土器を立て並べ、薪を燃やして塩を取る。

後世の入浜式塩田と較べると大変手間のかかる、効率の悪いものだが、こうして生産された塩は、朝廷に貢納品として送られ、また、物々交換の手段として各地に運ばれて行った。

この史上始めて“塩”を生活の糧として生産したのが、古代“海部（海人）”族と呼ばれた一群の人々である。彼らは、初め漁労や水運に従事していたが、日本に古代国家が誕生する古墳時代になると、多量の製塩土器と薪を使って大規模な“塩業”を始めた。

瀬戸内海沿岸は、後世の塩田を見るまでもなく、遠浅の海岸と雨の少ない気候、豊富な雑木林に恵まれ、原始的な塩生産には格好な地域であった。昭和三〇年代まで、瀬戸内海地方の特産であった塩業のルーツは、この海部族の製塩土器にあるのである。

宝　田　院（沼隈町常石）

南に瀬戸内海を望む山際にあり、無量山と号す。真宗

大谷派に属し本尊阿弥陀如来。鎌倉時代末、中国地方真宗布教の中心となった山南光照寺の開基と伝える明光が光照寺を弟子明空（良誓）に譲った後、明誓を連れて山南の市場に隠居、明光の死後明誓がこの隠居寺を継いで宝田院と号したという。

天正一四年（一五八六）と文禄元年（一五九二）の二度にわたり焼失。寺地を中山南村森迫に移し、さらに慶長七年（一六〇一）現在地に移ったという。もとは光照寺末であったが、後に同寺との間に争論が起こり、東本願寺直末となった。なお一七代明伝（誓存）は東本願寺末寺をきらい備中笠岡（現岡山県笠両市）に浄心寺を建立、西本願寺に属したという（備陽六郡志）。寺には嘉暦元年（一三二六）五月日付の一流相承絵系図を伝える。

（平凡社刊『広島県の地名より』）

九州探題渋川氏

渡辺氏が本拠を置いた山田（現熊野町）から南に峠を越えると、その名の通り「山に南」の沼隈町山南に入る。下るにしたがって開けた地域で、備後名産の畳表の本場として有名なところである。この地は南北朝時代以来、室町幕府の「御一家衆」という高い格式を持った渋川氏が支配したところだ。渋川氏は室町時代初期以来、室町幕府の九州支店というべき九州探題として権勢を振るったが、室町末期になると九州土着の大友氏や竜造寺氏によって九州から追い出され備後にやって来た。備後には、山南のほか御調郡八幡荘などを京都と九州を往来するときの中継地として南北朝時代から領有していたからだ。

備後に本拠を構えたのは探題教直の孫といわれる義陸（よしみち）である。義陸は八幡荘（三原市八幡町）の小童山城に本拠を置き、精力的に活動した。自身の正妻には備後きっての豪族宮氏の娘を迎え、息子の義正の妻には隣国安芸で頭角を現していた毛利元就の妹を迎えた。山南では土豪の桑田氏や岡本氏を家来として従え、中山南の要山に「矢栗城」を築いて沼隈半島に睨みをきかせた。一時は、山南はおろか西に山を越えた藁江荘（現金江町・藤江町一帯）をも支配下に置き、尼子・大内両勢力の間にあって備後の大名として重んぜられた。だが、3代目の陸景に子どもが無く、あっけなく滅んでしまった。天正元（1572）年のことである。

盤　台　寺（沼隈町能登原）

沼隈半島の東南端、瀬戸内海に突出した阿伏兎岬の先端にあり、阿伏兎ノ瀬戸を挟んで田島に対する。俗に阿伏兎観音とよばれ、本尊は海中より出現の観音石像。海潮山と号し臨済宗妙心寺派。寺伝によれば暦応年間（一三三八～四二）に覚叟建智が開基したが、その後衰退した。縁起には元亀・天

正年間（一五七〇～九二）鞆の江の浦（現福山市）に日頃熊野三山を敬う次郎左衛門という漁師がおづ、阿伏兎沖で漁をしていたところ中に古銭の入った長さ一尺ほどの石の観音像を引上げ、阿伏兎の崖上に仮の屋根を作って安置した。これを伝え聞いた人々が参拝し、これが毛利輝元の耳に入り輝元が大檀那となって観音堂を建て永代灯明料を寄進したとある。輝元建立と伝える堂（国指定重要文化財）は岬の高さ一〇メートル余の岩頭にあり、桁行三間・梁間二間、背面一間通り庇、一重寄棟造本瓦葺。外部は丹塗で内部天井に極彩色の百花図（藤井松林筆）が描かれる。棟札によれば寛文七年（一六六七）、元文三年（一七三八）・安永六年（一七七七）などに修理され、寛文の修理で堂後方の奥行一間が付足されたという。なおこの析出た棟札に「元亀元年前太守毛利輝元創建」とあったとも伝える。観音堂北側に建つ客殿（県指定重要文化財）は、桁行五間半・梁間五間半、入母屋造桟瓦葺で、中央に仏壇の間を設け、左右に書院と奥の間を配した禅宗の方丈建築。享和二年（一八〇二）ここの寺に詣でた尾張の商人菱屋平七は「筑紫紀行」に次のように記している。

飛島といふ小島をもあとに見なして、あぶとにいたる。さて登りて観音堂に詣づ。こゝは山の尾崎の海岸のうへに堂を建て、南方の海上にむけて観音の像を安置し奉る。堂の下に海潮山盤台禅寺といふ寺あり。其庭より廊下の橙道をのぼりて、堂にはまふづるなり。廊の中程に鐘接あり。堂の傍に常夜の灯篭あり。此観音堂より見下ろせば、数尋の下に青々たる海潮足元に涌かへりて、目も眩き足の骨も痒きばかりなり。（平凡社刊『広島県の地名』より）

唐　樋　門

草深は町の南西部にある。「草深はもと下山南より割きて

一村となる。草最深き所なりしためその名を冠せられたものか」と、町の資料で説明されている。この草深の南端に「磯新涯」という干拓地がある。往時は、寄の宮神社あたりまで入江をなしていた。葦が入江には生い茂っていたのであろう。福山藩の財政施策として、寛文年間（一六六一～七三）の頃およそ五十㌶の干拓が行われた。山南川の川口を堰止め、造成された新涯地への農業用水調節のために建造されたのが、草深の唐樋門である。堤坊の東側の一角に、がっしりと石垣を積み上げ、水路に石柱や大きな木の柱によって、樋門を組み上げ、巻きろくろによって用水を調節し、草深一帯の農地を守った。元禄九年（一六九六）と、安永二年（一七七四）の二度にわたって大修理が行われ、創建時の壮大な構築の原形を伝えている。昭和五十七年（一九八二）に解体復旧工事が行われ、樋門を上下する巻きろくろを復元、中央には昭相に入って使われたウインチもそのまま残されている。干拓史研究上、貴重な産業遺跡である。（神田三亀男『広島県文化百選』より）

長谷川新右衛門

寒風吹き荒む冬に植え付け、夏の暑いときに刈り取る。誠に、「藺草」の栽培は福山地方の気候と風土に根差した特産物と言える。

冬と言っても比較的温暖な瀬戸内沿岸、夏も雨が少なく晴れの日が多いこの地方は、刈り入れ時の降雨を最大の敵とする藺草にとって最良の気候を提供している。

備後地方に於ける藺草を原料とする「畳表」の生産は、古く中世にさかのぼる。早く鎌倉時代の記録に「備後筵」の名が見え、住まいに「畳」の使用が始まる室町時代になると、のちにその代名詞となった「備後表」が史料に現れる。すなわち長禄４年（１４６０）の『大乗院寺社雑事記若宮祭田楽記』に「備後表」の名が見られ、既にこの時代、「畳表」は備後の特産品として中央に知られていた。

その起源には不明な点が多いが、戦国時代の永正年間（15世紀初頭）にはかなり栽培されていたようである。熊本県の記録に、同県の藺草栽培は永正2年、備後より藺苗を取り寄せたのがその始めとされ、また、静岡県引佐郡の藺業は同16年、玉庵という備後沼隈郡今津生まれの僧が村民に藺草の栽培法を教えたのが始まりと伝え、このころには備後の藺業が広く世間に知られていたことが分かる。

しかし、初期の畳表の製法にはむだな点が多かったようである。すなわち、当時の畳表は「引通表」といって収穫された藺草のうち、長いもののみ使い、短いのは捨てていたのである。これではせっかく苦労して栽培した藺草の、半分近くを捨てることになり生産は伸びない。

この畳表の製法に一大改良を加えて、「備後表」を名実共に備後の特産品にしたのが、長谷川新右衛門（菅野十郎左衛門ともいう）である。

別名の「菅野」は、沼隈郡沼隈町山南の地名で、藺草の産地に育った彼は、早くよりこの「引通表」の改良に取り組んだ。そして、彼の努力によって完成を見たのが、「中指表」或いは「中継表」と呼ばれる、中継ぎの技法である。　この技法は従来捨てていた短い藺草も、途中で継ぐことによって畳表生産に使えるようにした画期的な製畳法で、後に「備後表」が畳表の最高級品の代名詞として、全国の市場を席巻する基となったものである。

彼がこの技法を開発したのは天文・弘治の頃（16世紀中頃）と伝え、その後慶長7年（1602）、福島正則の代官として沼隈郡山南に入った間島美作は、いちはやくこのことを知り、新右衛門に5人扶持を与え、「中継表」の生産を大いに奨励した。

さらに、美作の主君福島正則も「備後表」の生産に関心を持ち、さっそくその上品三千五百枚を徳川将軍に献上したのが、以後幕末までの恒例となった「献上表」の始まりである。

青年の父山本滝之助

我が国青年団運動の生みの親として知られる、沼隈出身の山本滝之助【1873―1931】の資料室が、このたび開館した沼隈町立図書館の一角にオープンした。玄関右脇の小部屋で、入り口には滝之助愛用の椅子が見学者を迎えてくれる。以前から尊敬する郷土の先輩として関心を持っていたのだが、改めてその生の資料に接すると感無量である。

滝之助は、決して歴史上の知名人では無い。今日、福山人100人に訪ねても「知っている」と答える人は無に等しいだろう。だがその業績と生き様を振り返ると、今日でも十分通用する「何か」が彼の人生にはある。例えば、彼が生涯叫んで止まなかった「田舎青年」の救済問題である。滝之助が青年期を過ごした明治期は、近代日本の出発点として、国運がまさに上昇期にあった時代である。都会では「文明開化」

を謳歌し、鴎外や漱石に象徴される「知性」が澎湃とわき起こった時代である。都会の巷には「書生」と称された若きインテリ達が、英書を手に青春を謳歌していた。しかし、一歩地方の農村に足を踏み入れると、そこは退廃が支配していた。特に青年達の生活は荒んでいた。江戸時代までの農村では、「青年」は村政の重要部分を担っていた。消防・祭礼・自警など村の生活の重要部分を彼らが担当していた。しかし、明治新政府の成立は、こうした村の生活を破壊した。消防・祭礼・自警活動のほとんどは新たに成立した地方自治体の仕事とされてしまった。青年達は目標を見失った。そして、文明即「都市生活」と考えられていた当時にあっては、彼らは決して「青年」と呼ばれることは無かったのである。彼ら農村に生きる青年達の生活が荒んでいったのも当然であろう。滝之助が憂い、その救済に情熱を注いだのもこの点であった。

二四才の滝之助は言う、「均しく之青年なり、而して一は懐中に抱かれ、一は路傍に棄てられる、所謂田舎青年とは路傍に棄てられたる青年にして、更に之を云へば田舎に住める、学校の肩書なく、卒業証書なき青年なり…（『田舎青年』）」

滝之助自身向学心に燃えながらも家庭の事情でそれを断念した「田舎青年」の一人であっただけに、その叫びは悲痛であった。滝之助の偉大さはそれを個人の悩みで終わらせなかったことである。世の中には自分と同じ悩みを持つものがいる。そして、彼らは仲間を求めている。これが「青年団運動」の原点である。

今日「青年団」はほとんど姿を消している。しかし、「社会から疎外されている…」と言う悩みを持つ者は増しこそすれ、決して減ってはいない。かつて全国を風靡した「青年団運動」の発祥地が福山地方であり、その主唱者が地方に生きた一青年であったと言う事実は、現代猶意味を持っている筈である。

◇

滝之助について続けたい。

彼の生家は、沼隈町の中心からやや東北に入った谷あいに、今も往事そのままの姿を残している。ごく一般の農家の作りで、正面に母屋があり、向かって右手に納屋、周囲は生け垣に囲まれ、簡素な門がしつらえてある。山本滝之助はこの家

で維新間もない明治６年【１８７３】１１月１５日、孫次郎・サタ夫妻の長男として生まれた。

明治１９年、１４歳で村の小学校を卒業した彼に最初の試練が訪れる。言わずと知れた「進学問題」だ。向学心に燃える滝之助は熱心に進学を希望する。だが父は許さない。結局彼は郷里に残り戸長役場に就職することとなった。

向上心に燃える青年にとって「田舎」の現実は目を背けたくなるようなものであった。村の青年達は小学校を卒業すると「若連中」と言うグループに入り、喫煙や夜遊び等の悪習に耽り、先の希望のない怠惰な生活を送っているではないか。彼はまずこの現実から逃避を考えた。丁度このころ「戸長役場」が廃止され【明治２２年】、失職した滝之助はこれを機会に改めて上京し勉学の志を遂げようとしたのだ。だが孝行息子であった滝之助はどうしても両親を残して上京する決心が付かず断念。同年１０月、沼隈郡第十四小学校（現千年小学校）の教師に就任、この現実に立ち向かうこととなった。

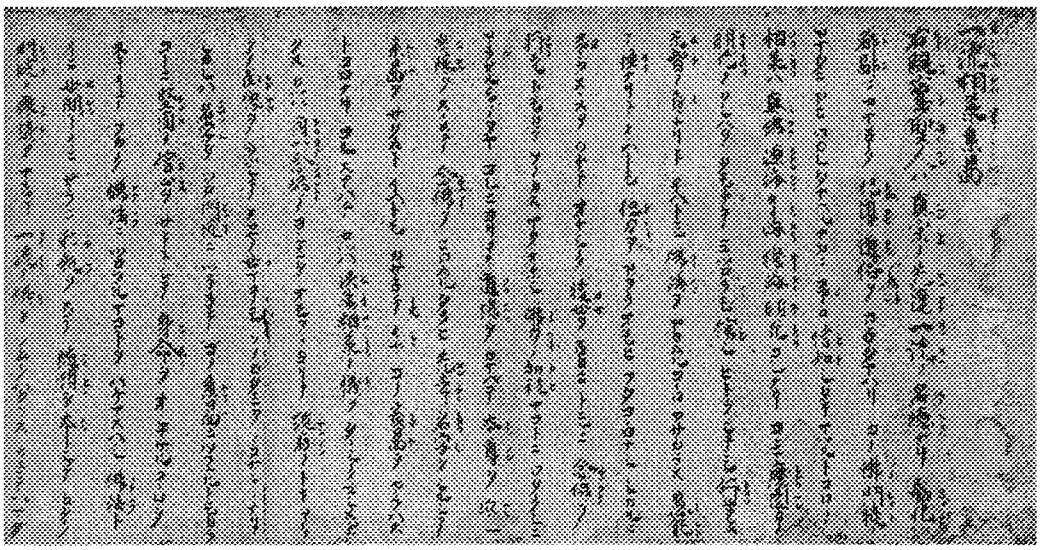
彼の手段は、まず徹底的に討論することであった。「自分達はこれでいいのか」、『好友会』という青年達のグループを組織した滝之助は、村の若者達と膝詰めで話し合うことから始めた。

身近な問題を話し合う中で、運動は次第に形を整えていった。明治２７年には、「若連中」の改善はまず少年からと、尋常小学校の卒業生を中心として「千年村少年会」を結成、同３６年には「千年青年会」を組織し、ここに日本青年団運動は滝之助の首唱のもと、沼隈地方で最初の産声をあげたのである。

滝之助の活動は全国に大きな波紋を投げかけた。青年の生活改善、修養を目指して、全国各地で青年団、青年会の結成が相次ぎ、滝之助の運動は大きな盛り上がりを見せ、ついには大日本連合青年団の結成、財団法人日本青年館の建設へと突き進んで行くことになるのだ。滝之助が「青年の父」と呼ばれる所以である。ただ、彼の運動は当時の国策に利用された面もないとは言えない。大正デモクラシー以後、日本は急速に右傾化し、大陸に帝国主義の矛先を向けていく。青年団運動も昭和に入ると、ご承知の通り軍隊の予備軍的存在と化していった。だが、滝之助の思想自体は後の軍国主義とは無縁のものである。彼は純粋に農村青年の救済を考えた。それは青年団の活動が一番盛りを見せたのは戦後のことであったことを見ればよくわかる。昭和６年、５９歳で亡くなった滝之助は自ら育てた青年達が戦場で散っていくのを見ることはなかったのである。

沼隈半島史跡地図
長和庄
葉江庄
山南
和光寺跡
小森
神村古墳跡群
神村八幡社
岩田古墳群
茶接待碑
松永塩田跡
承天寺
下迫貝塚
馬渡貝塚
金見八幡社
宮の尾貝塚
金江ムロの木
草田古墳跡群
六本堂廃寺跡
岡本山路宅跡
丸山城跡
一乗山城跡
光照寺
長谷川新右衛門墓
山本滝之助生家
満越遺跡
宝田遺
草深の唐樋門
洗谷貝塚
大可島城跡
福山市
尾道市
松永湾
至本谷
至中津原 至よこお
至新見
井原

メモ



真宗明光派の絵系図（光照寺蔵）

編集・発行

備陽史探訪の会

〒720－0824

福山市多治米町５丁目１９番８号

TEL（084）953—6157